

---

# 桜

潤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜

### 【著者名】

潤

### 【Zコード】

N77150

### 【あらすじ】

兵庫から大阪の学校に転校することになった  
男の桜井兄弟は双子である。

大阪についてから

女の桜川姉妹と出会った。

その桜川姉妹も双子であった。

兄の優斗は姉の玲に恋するのであった。

プロロ。

「またなあ～」

「おのれらこそ達者でなあ～」

見送りの友達に手をふっている

「しかし、

兄上、

なんで我らは大阪なんぞへ参るのであるうか?」

「オトンが単身赴任で

さびしいー

つていうからしゃあなし俺らが引っ越すんやひ

「どうしようもない父上じやな」

「どうでもいいけど、お前その口調直せ」

瓜二つの顔が話している。

兵庫から大阪へ引っ越すのだ。

所変わつて大阪。

女の子が2人話している。

「でさあ、あのテレビ見た?」

「見た見た」

「ありえなくねえ?」

「ありえへんよなあ

もう一人の女の子が口を割り込んだ。

「それよりさあ、

今日ウチらのクラスに転校生2人くるなんてなあ

「気になるなあ。

今まで話してたのは紫やつたのはわかるねんけど、

2人揃うとどつちがどつちかわからへんやん」

「あ、ヒド～」

「でも、その転校生もなんでこんな田舎へんねやう」

「ほんまや。

ウチらの学年で20人弱なのに」

ここにいるのもまた

瓜二つの姉妹である。

「着いたな」

「兄上、

新しい学校はどんなところであるうか?」

「んなことより先にオトンの家さがしや」

兄上そう呼ばれたほうが地図をみてさがしている。

「拙者に貸していただけぬか、兄上」

「わかるか、それ?」

「もう。

「これはどう見るものなのだ?」

「どうでいいけどさあ、

「口口本当に大阪か?」

「確かに、入っ子一人みないな」

「でさあ、

そろそろウチはダイエットひとつと毎つんやがださあ

一緒にどう?」

「食べる量減らさないなら、いいけど」

「まつたく、あんたは」

「あの～、すいません。

そこの美しいお2人さん

今までダイエットの話をしていた2人が振り返った。

「ナンパしててるのか?

「兄上」

「少々道を教えていただきたいのだが、  
よろしいか?」

女の双子は少々ためらいながらも承諾した。  
兄上と呼ばれた男は持っていた地図を  
2人のうち片方に渡した。

「…」めん!

ウチはわからん」

「ちょっと、みして」

「多分、わからんで」

「あ、

「この人の名前見たことない?」

「あつ、

あのおつせんや」

「この人とどういう関係なん?」

「よくぞ聞いてくれた。

その方は我らの父上であるお方だ」

「そ…そつ。

とりあえず、教えるわ」

(ええんか?

(あいつの子やで)

愛想笑いをしてから軽くため息をついて、

「口じや言ごにく」から、紫がそこまで一緒に行くな

「ありがとうございます」

「この恩は一生忘れないです」

「うちは、桜川 紫ね。

さつきまでおつたのは姉の玲やで。

あんたら今何歳なん?」

「俺が13歳で一応兄やな」

「同じく拙者は13歳で、  
IJの方とは双子の弟といつになつてゐる」

「えつ、あんたらも双子なん?」

「しかも13歳つておないやん」

「やつぱりそつちも双子か」

「あ、俺は桜井 優斗な

よろしく」

「拙者は桜井 武である。

よろしく頼もつ」

(できれば弟くんとは関わりたくないなあ)

「あ!

ネ「や~」

「ちょい、待て」

「弟さんとあなたじや性格が全然違つね

「せやろ?」

よくあつちでほんまに双子か?

つて聞かれたわ

「ニヤ~~~~~」

「兄上に紫殿。

拙者、命がけでこのネコを捕まえたのだ

「お前が余りにしつこいからしゃあなし捕まつたげでん  
3人は驚愕した。

「ああ、拙者感激である。

今このネコから声がしたのだ

「やつぱ、あればネコ?」

「お~。

そのネコは危ない。

違うネコにしろ

兄と紫が叫んだ。

くなにが危ないだ。

「いつも俺らを危ない田に令わせよ！」  
「やはりこのネコの声だ。」

拙者はもう決めた。

「このネコを我がペシトにするのだ」  
「誰が、てめえなんかのペシトになるもんか！」  
「頼むからそれだけは…」  
「もはや兄の声に力がない。」  
「このネコの名をどうしよう…」  
「マジで飼う気か！」  
「逃げねばならん」  
ガウ。

ネコが弟に噛み付いた。

「そ、かそ、か。」

そんなに拙者が気に入つたか

ん？兄上に紫殿がいない。

すでにそのころ2人は目的地に到着していた

「ここやで」

「ありがとうな」

「いえいえ」

「で、どうやつた？」

あの変態ジジイの子は

姉の玲が聞いている。

「弟君のほつめつちや変けど、おもうこ」

「今日からやなあ学校」

「おお～、オマジナ今日から学校か」

「父上、

「これから学校に行つてまじります」

「おまつ、制服は？」

「これではないのか？」

そういうてきていたのは

戦国武将の鎧だった。

「もう、ええわ」

「俺先に行つとくわ」

「つあ、校長室にいかなあかんねやつた」

「兄上、どうして拙者を置いていったのだ」

「どうでもいいやろ

学校の時くらい…」

生徒が過ぎ去る度に2人を見る。

(この人らに聞こ)

「あの〜、すいません」

「ん。何？」

おそらく年上なのだろ〜。

そんな雰囲気がする。

「口の校長室つてどこですか？」

「職員室の真ん中にあるわ

「あらがとう」そこままで

「失礼します」

「ああ、キミ、

新しい転校生かい？」

「はい」

「何年生？」

「むこうでは中2でした」

「ま、この学校でも中2だし、

頑張れよ。

あつ、ボクは生徒指導の田代だよ

「あ、あのぼくら校長に用事があるんですけど」

「校長？」

「それもボクだよ」

「えつ、

田代殿は生指の先生では？」

「まあ、

「そりなんだけど兼校長もやつてるとこにつことかな  
「これ、先生に出すようにいわれたんだですけど」

「ん？ああ。

「じゃキミらは2年だから右端から2番目の教室ね」

「えつと、今日から転校生が来ます」

ザワザワ。

ガラガラ。

「えつと、ボクらがその転校生です」

「彼らは親の事情で急にココに引っ越すことになつてね」

先生が説明しました。

「ああ、キミらにぼくの自己紹介がまだだつたね。  
僕は2年担当の江藤だよ。

生徒のほうから質問ない？」

「その前に転校生の自己紹介は？」

「そうする？」

先生が尋ねる。

「じゃ、お言葉に甘えて」

兄の方から自己紹介を始めた。

「えつと、俺は桜井 優斗です。

兵庫の方から来ました。

えつとこの辺のことはよくわかんないので

案内とかしてほしいですね」

「え、拙者は桜井 武である…」

「応弟とこいじやうじやうわるな」  
ハア～。

相変わらず武の口調は変わらない。

武はこの「自称武士の切れ端」とこいつキャラのせいか、  
すぐに同性の友人はできた。

優斗は桜川姉妹と親しくしていたこともあって  
異性の友達が多くできた。

学校が終わってすぐにこの町の案内が始まった。  
だがこれが恐ろしいことになるとは  
誰も思っていなかつた。

武ルート

「なあ武～、ここはなあお前なら喜んでくれると想つで～  
「何があるのでござるか？」  
「ジャジャーン。

一応この町に伝わる何かやばい奴が祀られているとこいつ祠だつた。

「なあ開けてみようぜ」

「いいねえ～。

お前のやうこうとい氣に入った！」

ガチャ。

「…」

「これは？」

「なんかやばいなあ」

「だつて空氣おかしいで、今口口の」  
「なんじや、人の眠り妨げるのは」  
「何が起こつたん？」

「なんか聞こえへん？」

「あ！」

いたいた、ネコ」

＜ゲッ、この前の奴やん＞

「待て——ヤ——」

友人の町案内も忘れてネコを捕まえるのに必死になつて來た武であつた。

「あ、なぜひこひせめ？」

## 優斗ルート

「リリのケーキ屋、めっちゃ美味しいで！」

「どんな風に？」

—ケリー、ムガロの中でもうけて

「二のアキ」。

そんなウマーんや

「せいで！」

「お、一緒に食べて」と、さわやかに

「マジでー?」

「なんて」

あたつを覗度す男の影。

「いっぱい彼女ができたんだなー

「違う！」

今日は俺がこの町に早くなじめるように案内してもらひてんねん」

「 そ う か そ う か 。

一気に7股先かけて同時テー卜があ。

お前の性欲もすごいのう

「違うわ！」

なあ？

「うん」

「その度胸にワシは感激した。

」のケーキ屋はお「」なり「

「やつて、どうする？」

「ただで口口のケーキ食べれんねんで。

行くに決まつてんやん」

ガラガラ。

「いらっしゃいまで～」

「フ名様ですね」

「VIPな客だ」。

金は受け取るなよ。

ワシのおじりだからな

～～～～1時間後～～～

「ありがとうございました」

店内でもつめんどいから

地図で説明を受けた。

が、全て口口のはおいしい。  
この服はおしゃれとかばかりで

結構実用的な町案内だった。

ただし女子にとつてはだが…。

「ねえ。

優斗ウチと付き合つてよ

「早ー」

くその通り。

優斗よ。

お前のはさんだんは間違えていいなー。

やつはケーキは田舎で告白しての

「お前誰？」

つかゞいやねん? 「

「 ノ「じゅ ノ」。

見えるか? 」

「俺も思つ。

誰? 「

「ハア。」

「の手は使いたくなかったんだがねえ。

み~さ~づて~ごらん 」

「下? 」

「ネコ! ?

「ネコが話してゐよ? 」

「なんで? 」

「誰がネコじゅ。」

僕は立派なネコじゅ

「妖怪変化? 」

「だからネコだつて! 」

「あ~~~~~~~~~~~! 」

お前あん時のネコ! 」

「ニヤ~~。」

貴様は今日も僕を捕まえにきたのか? 」

「は? 」

「ネコ~~~~

「お~。」

武このネコ話すぞ

「そんなの知らないニヤ~。」

やつと見つけた今日この拙者のペツトになれ~

「お~。それはちよつと」

なんだかんだと気付けば3年になつていた。

「玲、ちよつといい? 」

「ゴメン。ウチは紫」

「ハア」。

お主もまだまだ未熟やのうへ

「またお前か」

「そうじや。」

家の中じゅうヒヤジやからうへ

「じゃそのおひまな所へお帰り」

「ハア」。

告白しようと覚悟を決めたのに

人間違える人に帰れとは言われたくないねえへ

「うつさい」

「えへへへへへへへへへへ！」

優斗つて玲が好きやつたん？」

「ううん」

「いつ、どこから？」

「それはちょっと……」

「え、ちょっとマジで気になるなあへ。

いわへんねやつたら、

「うちは言つよ~」

「いや、できればいいたくない」

「本当に言つよ？」

玲とは姉妹やからどこででも言えるんだけどなあへ

「こりや言つたほうがいいにせへ

「わかりましたよ。

絶対言わんとつてなあ」

「まかしどき！」

「大船に乗つたつもりでいとき！」

「初めてみた時からずっとかわいいなあつて

思つてて実はマジで俺のタイプバッヂ的な

「ようするに人目惚れと？」

「うん」

「まあ大船はいつか沈むのが落ちやけどなー。」

「言わんとつてなあ」

翌日

「紫、優斗と昨日何の話してたん?」

「えーとね」

「言つたちゅうたろが」

「もしかして恋バナ?」

「やの通り」

「またお前か、ネ?」

「それはどうでもいいけど誰が好きなん?」「  
ど、どりでもいにはないんじやない?」

喋るネ「だよ、喋る」

「い、いわん」

「なんで~、

紫には言つてウチにはいわへんの?」

「いえむじつちやないな」

「はは~ん。

ウチがおしゃべりだと思つてたり?」

「や、そ、そ、そ、そ、そ、うだよ」

(素直になればいここのこなあ、優斗)

「なあ、誰何をあ~?」

「この前からずつとこいんな感じである。」

「だれでもこいやん?」

「まあ…ほ~

「黙れネ?」

「やあ~、またこのネ?やん」

「なんか、こいつもおんねんけどなあ」

「いいやん、かわいいやん

「玲もね」

！？

言った本人もだが言われた本人もおどろいた。

「いま、なんて？」

「いや、べつに…」

「なあ、紫」

「何？」

「優斗って誰がすきなん？」

「クラスつか学校には10人しかいないし、まさか本人には言わんし…」

「さあ、誰だろうね？」

沈黙

「昨日な、いつも優斗の近くにいるね口のことをうちがかわいいって言つたら、優斗がなうちのことかわいいって言つてきん

「そうなん？」

「よかつたやん」

「何があ？」

「仮にもあのエロじじいの息子やで？」

「でも、

「今結構なかええやん」

「せやけど…」

「つてか優斗すきなん玲ちゃうで」

「なんや～

（一応黙つといたで、優斗）

屋上で優斗が寝ていた。

「優斗～～

「優斗～～

桜川姉妹のどちらかが走つてへる。

「えつと、紫やんなあ？」

「やつやで」

トコトコ

（紫の声？）

誰や？

つてか何してんの？）

「まったく……う……ヒレ……の見分け方くら覚……なあ

「ゴメン」

「ほんまに玲が好きなん？」

優斗は

「うん」

（えつ…）

優斗つてウチの事が好きやつたんや（や

「昨日なバレそつになつてんけどな」

「けど？」

徐々に優斗の声に怒りが混じつた。

「ちゃんと」とまかしたで

「よかつた。

明日で2学期終わりやん

「うん」

「だから

明日式終わつてから皆ひりょつかなつて思つてんねん

終業式はなんなく

終わつた。

夕方

「玲～。

ちょっと今いける？」

優斗がよんでいる。

「ええよ」

（人生初々、告白されんの）。

緊張するわあ）

カタカタ。

ガタン。

「大丈夫？」

自宅の玄関でこける人はじめて見るなんけど……」  
ちょうど時間的にはきれいな夕焼けごろである。

「どうしよ。

あ！

神社行かん？」

「ええよ」

「この長い長い道をキミを自転車の後ろに乗せて  
ボクは神社へ向つよ」

「何？ その歌」

「今、俺が作つた」

「うそや～」

「ゆずのパックた」

「やつぱり～」

「じゃあこれは？」

ボクがキミを守る

心にそう誓つたんだ

改札をでて

無邪気に手を振るキミ

ボクはキミに好きつて

言いたかつたんだ

でもいえなかつたや

そんな勇気ボクにはなかつたよ

もし、

あの時願いが叶うなら  
キミに「好き」って言つ勇気が欲しいな  
「知らんけど、それは？」  
「俺が作詞した！」  
「すごい～、さすが優斗」  
「でしょ～？」

神社到着。

「あんさあ、玲」

「紫です」

「玲でしょ」

「バレた？」

「えつと、

俺はさあ、

今まで何人かと付きあつたことがあんねんけど、  
振り返れば、

たいてい一目惚れか、

友達として仲良くなつてから  
好きになつていくつて感じばっかやつてん

「そりなんや」

(いつたい何がいいたいんや？)

「で、

玲らは初めて見た時に

この2人めつちゃかわいいなあつて思つてん

「でも、なんかその時に紫やなくて  
玲のほうが気になりだしてきてん」

「そう」

「で、まあ、え～と  
好きになりました。」

付き合つてくれる?

「え~」

「ちよ待つてー。」

「何?」

「返事の前に俺が昨日徹夜してまで  
作った詩聞いてくれへん?」

「ええよ」

「川のせせらぎ音

小鳥のさえずり声

どんなものにもキミはかなわな~よ

ボクにとつてキミは

どんな存在なんだろ~?

そんな自問自答を繰り返す

毎日が続くけど

答えは出ないよ

いや、違うや

答えなんかでないんだ

どんな花の香り

どんなポプリの香り

どんなものにもキミはかなわな~よ

キミとは一緒にいると  
楽しいしうれしいよ

1分1秒でも大切にして、

いとしくなるよ

キミはボクとこる

どんな風に思うんだろ~?

どんなかわいいペツト

どんなかわいい画像

どんなものもキミにはかなわないよ

ボクはキミと出逢つて

何もかも変わったよ

普段の生活から休みの日まで全部だよ

もう僕の世界の中心は

キミなんだ

キミもボクと同じ風に考えてたらうれしいな

ボクはキミの前では、  
ばずかしくていえないけど、

「ボクは63億人のなかで

キミが一番すきなんだ」

そう思つてゐるよ

ねえ、

この言葉をキミに伝えたら

どう反応するのかな？

どんな反応でもいいから、

今だけは

「ボクは63億人の人の中で  
キミが一番好きだよ」

63億人に聞こえるくらいの声でいうよ

「うん。

まあ、

ここまでしてもううて嬉しいねんけど、

優斗は好きやねえい  
いや、  
いつかな?  
うん。

「優斗とひまわり

(後書き)

だいぶ前に書いた小説を見つけて  
なんとなくしPしましたw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7715o/>

---

桜

2010年11月7日17時55分発行